描写述語のラベル付け分析

横越　梓

1. 導入

本稿では，（1）や（2）に示されるような，描写述語と呼ばれる二次述語を含む構文が歴史的にどのような構造変化を経たのかを，意味的・統語的特性に基づいて考察し明らかにすることを試みる。

（1） a. Jones fried the potatoes naked. (Rapoport (1999: 653))
　　 b. Jones cut the bread drunk. (ibid.)
（2） a. Jones fried the potatoes raw. (ibid.)
　　 b. Jones cut the bread hot. (ibid.)

（1）と（2）のような現代英語の例において，描写述語は主節の項と叙述関係を持つ述語である。（1）ではnakedとdrunkが主語のJonesと叙述関係にあり，（2）ではrawとhotが目的語のthe potatoesとthe breadとそれぞれ叙述関係にある。

これまで英語の描写述語を含む構文に対しては様々な議論がなされてきたが，その統語構造については未だに見解の一致をみない。さらに史的コーパスを観察すると，描写述語を含む構文では統語的に変化が起こったことを示す事実がある。本稿では，当該構文に起こった通時的変化にChomsky（2013, 2015）におけるラベリングアルゴリズム（以降LAと呼ぶ）の下で理論的に説

明を与える。

2. 特性の概観

まず，当該構文の意味的特性について概観すると，現代英語においては，(3) と（4）に見るように，描写述語として様々な語彙範疇が生起できるが，（5）と(6)に見るように，どのような述語も自由に生起できるというわけではない。

(3) a. John wrote the letter fearing the worst. (Ike-uchi (2003: 157))
b. John left medical school a doctor. (ibid.)
c. John wrote the letter in a bad mood. (ibid.)
d. John wrote the letter angry. (ibid.)

(4) a. John submitted the book lying on the table. (ibid.)
b. John submitted the book in a mess. (ibid.)
c. John submitted the book unfinished. (ibid.)

(5) a. Roni bought [the dog]$_i$ sick$_i$. (Rapoport (1991: 166))
b. Roni cut [the bread]$_i$ wet$_i$. (ibid.)

(6) a. *Roni bought [the dog]$_i$ intelligent$_i$. (ibid.)
b. *Roni cut [the bread]$_i$ white$_i$. (ibid.)

しばしば指摘されてきたように，この構文に現れる描写述語は，通常関連する名詞句の一時的な特性を示すものに限られる。この制限に関しては，これまで主に局面（段階）レベル述語（stage-level predicate，以降SLPと呼ぶ）と個体レベル述語（individual-level predicate，以降ILPと呼ぶ）の間の違いに基づいた説明がなされてきており，Rapoport（1991）は，描写述語はSLPでなくてはならないと主張している。これは（5）と（6）の対比を正しく予測するが，実際には（7）のように，ILPが生起した例も観察される。

(7) a. Jones prefers her coffee black. (Rapoport (1999: 654))
b. I like my furniture heavy. (岸本・菊池(2008: 60))

Rapoport（1993）は，（7）のような例は（1）や（2）とは別の構文であると主張しており，本稿でも述語が持つ意味のタイプによって，当該構文の構造は異なると仮定する。

統語的特性について概観すると，主語指向の述語と目的語指向の述語が異なる統語位置を占めることを示す経験的事実が幾つかある。例えば，主語指向の述語と異なり，目的語指向の述語は文頭に置くことができない。

（8） a. Totally naked, the man ran across the room.
b. *Totally raw, we ate the meat.

また（9）に示すように，描写述語が文中に共起する場合には，主語指向の述語は目的語指向の述語に先行することができない。

（9） a. John$_i$ ate the salad$_j$ undressed$_j$ naked$_i$. (McNulty (1988: 33))
b. *John$_i$ ate the salad$_j$ naked$_i$ undressed$_j$.

このような観察から，主語指向の述語が目的語指向の述語よりも構造的に高い位置にあると考えるのが一般的である（Rothstein（1983）やMcNulty（1988）を参照のこと）。

主語であっても非対格の主語であればILPの描写述語によって叙述されることが可能である。したがって，主語と目的語の対比として扱うよりも，外項と内項の間に見られる対比として観察する。

また，Bruening（2016）が観察しているように，描写述語は小節内に現れることができる。

（10） a. I want [the soldiers on the parade ground fully dressed]!
b. [Maxwell in a dress drunk] is a sight to see!
c. With [Hope in the hospital hurt], we're likely to lose the match.
d. I consider [him beneath contempt drunk]. (Bruening (2016: 9))

小節は，主述関係を含む，すなわち節のようであるという点でVPのような語彙範疇よりは大きな範疇であるが，以下に示されるように，時制や否定を含まず，文副詞と共起しないため，CPやTPよりは小さな範疇だと考えられる。

（11） a. *Mary honest.
b. *Her my best friend.
c. *John in the garden.

（12） a. John considers Mary probably to be scared of snakes ---certainly, she is scared of snakes.
b. ?*John considers Mary probably scared of snakes ---certainly, she is scared of snakes. (cf. Nakajima (1991: 40))

（13） a. *I consider Mary not happy.
b. *I consider Mary never happy.

Bruieningが指摘するように，小節内に描写述語が生起できるという事実は，描写述語がCPやTPよりも構造的に低い位置を占めることを示している。

3. 分析

3.1 理論的枠組み

本稿で仮定するLAは，Chomsky（2013, 2015）によって提案されたもので，統語対象は自由に適用可能な併合によって構築されるが，インターフェイスで適切に解釈されるためにはラベルが付与されなければならないとするものである。ラベルの決定方法については，主要部と句が併合された場合には最小探査（Minimal Search）により主要部が当該構造のラベルとして決定される。しかし2つの句が併合された場合，最小探査によるラベルの付与は不可能である。これを解決するため，LAでは以下の2つの方略が仮定されている。第一の方略は移動操作を利用するもので，どちらか一方の句が移動することによって残された句がラベルとして決定される。第二の方略は素性共有を利用するもので，2つの句が素性を共有している場合，その素性の順序対がラベルとして選ばれ

る。また，Chomsky（2015）では，以下のように，TやRは弱く単独ではラベルになることはできないと述べており，そのため素性の共有によって強化されなければならない。

（14） T is too weak to serve as a label. (Chomsky (2015: 9))

（15） ... R is universally too weak to label,... (ibid: 10)

素性のAgreeについては，Omune and Komachi（2022）におけるFormCopyの考え方を採用する。彼らは，Chomsky（2021）のFormCopyが素性に対しても適用されるという見解に基づいて以下のように提案している。

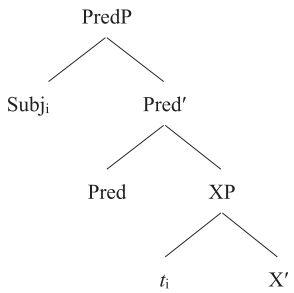
（16） The Σ-based Agree (ΣAgr):
The Σ-based Agree (ΣAgr), appropriating the third-factor Search Σ, applies to two structurally identical features and establishes the Copy relation between them. ((Omune and Komachi (2022: 4))

Omune and Komachiの分析によれば，Agreeは素性間のコピー関係を確立することによって達成されるということになる[1,2]。

3.2 先行研究とPredP分析

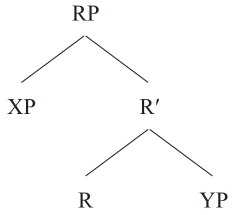
Svenonius（1996）は，PredPは以下の構造を持つ機能範疇であると仮定している。

（17）



本稿でも基本的にこれを仮定するが，Predの性質には多少の修正が必要である。den Dikken（2006）は，叙述関係がRelatorによって構造的に導入されるとし，それを主要部とするRelatorPを提案している。彼によれば，Relatorは2つの要素間の何らかの関係を取り次ぐ役割を持つ要素であり，あらゆる機能範疇がRelatorになり得る。したがって，2つの要素を叙述関係によって結びつける役割を持つPredもまたRelatorということになる。

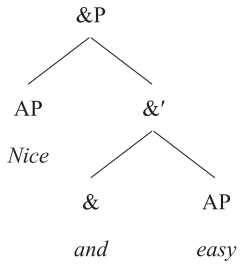
（18） *The syntactic configuration of predication*



(den Dikken (2006: 11))

Relatorについてここで注意すべき点は，den Dikkenの分析を仮定すれば，等位接続もRelatorによって導かれるということである。（19）ではandがRelatorとして機能し，2つのAPの等位接続の関係を導いている。

(19)



(den Dikken (2006: 17))

等位接続詞は意味論において，1つの集合を表す言語表現を別の集合を表す言語表現に関連付け，2つの集合の共通部分を導く。この意味において，(18) におけるRelatorはすべて論理演算子“∩”である。叙述は意味論的に積集合として表現できると仮定すれば，叙述と等位接続は意味論的に共通していることになり，したがって叙述を導くPredがRelatorであるなら，それが等位接続詞に等しい働きをしても不思議ではない。つまり，den Dikkenの分析を仮定すれば，第一等位項と第二等位項の関係は，主語と述語の関係と同一の構造形の下で確立されることになる。

4. 描写述語の通時的変遷

前節で仮定した機能範疇Predは，14世紀に叙述関係を確立する要素として小節内に生起するようになったとされる(Tanaka and Yokogoshi(2010)を参照)。これを仮定すると機能範疇Predの出現を境に描写述語の生起できる環境に何らかの違いが見られると予測される。なぜなら描写述語は意味的に等位接続を含んでいるからである。

横越（2020）では，英語史において描写述語がどのような構造を持っていたかを考察するため，PPCME2により，West Midland方言に絞って中英語M1期からM4期までのデータを検証している[3]。二次述語の持つ意味のタイプと叙述される名詞句が外項か内項かによってデータを整理した結果が表1であり，右側にその割合の推移が示されている。

表1　中英語期における二次述語のタイプ（West Midland）

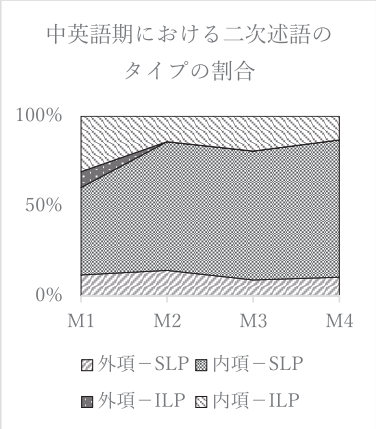
（i）用例数

	M1	M2	M3	M4
外項―SLP	8	2	6	4
内項―SLP	33	10	48	29
外項―ILP	6	0	0	0
内項―ILP	21	2	13	5
計	68	14	67	38
用例数	7785	1054	8760	5731

（ii）割合

	M1	M2	M3	M4
外項―SLP	11.8	14.3	9.0	10.5
内項―SLP	48.5	71.4	71.7	76.3
外項―ILP	8.8	0	0	0
内項―ILP	30.8	14.2	19.4	13.1

※SLP/ILPの判断が困難な用例については除く



（横越(2020: 36)）

（20）−（23）はそれぞれの用例の一部である[4]。

（20）　M1

a.　〈外項主語―SLP〉

& ich schal *schawen* **al naked** to alfolc þin cwedschipe. & to alle kinedomes. [...]　(CMANCRIW-1, II. 238.3469)

b.　〈内項主語―SLP〉

for steortnaked he *wes to spoilled* on þe rode

(CMANCRIW-1, II. 191.2704)

c.　〈外項主語―ILP〉

For þe eorðe **al vnneð** & þe treon alswa *openeð* ham.

(CMANCRIW-2, II. 252.96)

d. 〈内項主語—ILP〉

þullich ich chulle *beon* in meidenes liflade. **ilich heouene engel**

(CMHALI, 163.495)

(21) M2

a. 〈外項主語—SLP〉

Marie ne *ran* not hyder and þyder, **bisy to vnderfonge gystes:**

(CMAELR3,36.308)

b. 〈内項主語—SLP〉

and also whan vre lady for drede of Herowd fleþ in-to Egypte wit here child in here lappe, let here not *goon* **alone,** (CMAELR3,41.432)

c. 〈内項目的語—ILP〉

And aftur-ward, beyngge ynlyche wroþ wit hym-self, he ful on to *smyte* most greuous batayl aȝens his owne body; **so greuous** þat þe þyng þat semede necessarie to þe body, he witdrow hem. (CMAELR3,32.157)

(22) M3

a. 〈外項主語—SLP〉

Then, on a day, as þys justyce sate yn hys justyre, yn sight of all men, þer come yn þe fayryst woman þat euer þay seghen, clothyd all yn grene, and *broght* a fayre child yn hor lappe, **blody and all tomarturd**.

(CMMIRK, 114.3131)

b. 〈内項主語—SLP〉

hit bifelle so þat Kyng Aurilambros *lay* **sike** at Wynchestre

(CMBRUT3,62.1864)

c. 〈内項主語—ILP〉

and two spyres of fyre *stoden* out of hys hed **lyke two hornes**, so þat þe pepull myght not speke wyth hym for clerte, tyll he toke a kerchef and hulyd hys face. (CMMIRK, 102.2778)

(23) M4

a. 〈外項主語—SLP〉

And so they *dud*, **all armed sauff hys helme**.

(CMMALORY, 642.4020)

b. 〈内項主語—SLP〉

and theryn *stack* a fayre swerd **naked** by the poynt,

(CMMALORY, 7.193)

c. 〈内項主語―ILP〉

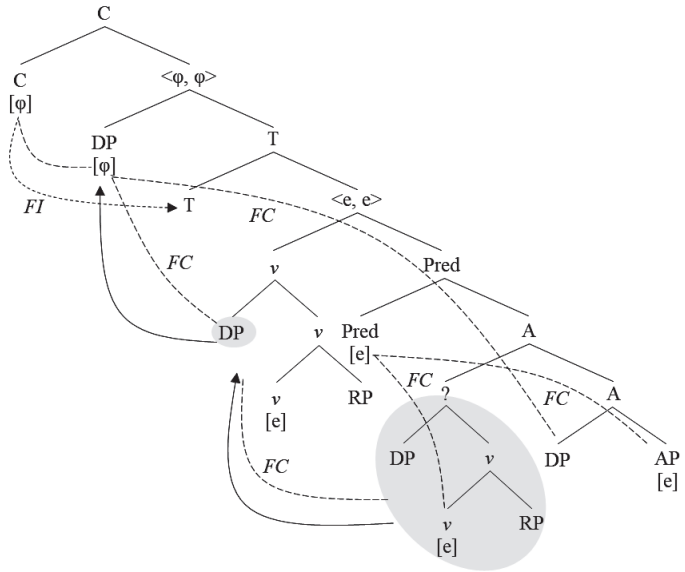
Anone a munke ledde hym behynde an awter where the shylde *hynge* **as whyght as ony snowe**, (CMMALORY, 638.3905)

表1から，描写述語の全生起数中に占める割合を見ると，ILPは減少傾向に，SLPは増加傾向にあることが分かる。特に内項指向のSLPが増えILPが減っている。外項指向のILPの割合はM2にかけて減少し，最終的に消失したものと見られる。14世紀に機能範疇Predが出現したとすると，M2期を境に統語構造が変化したことになる。

5. 描写述語の統語構造

前節までで概観した描写述語の特性を説明するために，本稿では外向指向と内向指向で構造は異なると仮定し，また，Predの出現前と出現後でも構造は異なると仮定して，それぞれの構造を提案する。まず，Predを伴う現代英語の描写述語構文を検討する。外項指向の描写述語としてSLPが生起した場合から見てみよう。

(24)

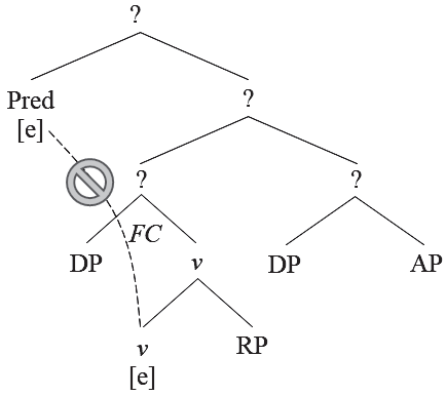


{DP, *v*P} と描写述語 {DP, AP} がExternal Merge（EM）した後，述語の事象項に相当する未付値のe素性（event feature）を持つPredが導入され，*v*およびAが持つ値を持つe素性とAgreeする。このATB的なAgreeはPredの課す一致条件を満たしていることに注意されたい。さらに {DP, *v*P} がInternal Merge（IM）を受け，形成される統語体は*v*とPredの共有するe素性により〈e, e〉のラベルが付く。TがEMされた後，{DP, *v*P} からDPが抜き出されて主語位置にIMし，次に導入されるCと*φ*素性において一致する。*φ*素性はTへと素性継承され，{DP, TP} のラベルは〈*φ*, *φ*〉に定まる。最後に，転送の際にFormCopyが適用されると，DPの下位2つのコピー，{DP, *v*} の下位コピーはLAにとって不可視となり，{DP, *v*P} のラベルは*v*，{DP, AP} のラベルはA，{{DP, *v*P}, {DP, AP}} のラベルはAとなるため，全ての統語体がラベルを与えられ，派生は収束する。またここで，Predを介した*v*とAのe素性の同定は，両者の表す事象が同時的であるという解釈を与える[5]。

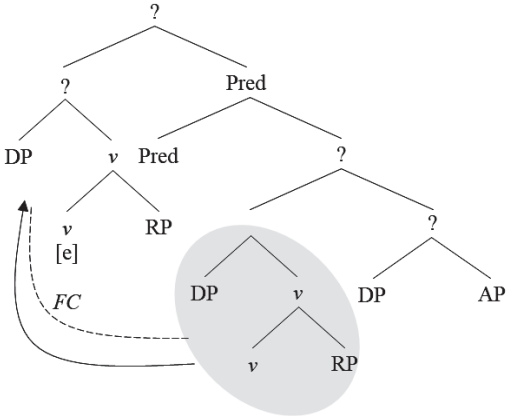
ここでもし，外項指向の描写述語としてILPが生起するとどうなるだろうか。

Predがe素性を担う場合，それは値を得ることができない。*v*のみとのAgreeは等位構造の一致条件に反するからである。一般的に，等位項の間にはある種の平行性がなければならないとされ，ここではそれがAgreeの操作にも適用されると考える。一方，（25b）のように，Predがe素性を持たずに派生に入ればこの問題は回避されるが，Predと*v*の間で素性共有が起こらないため，{{DP, *v*P}, PredP} はラベル付けが不可能になる。もちろん，{{DP, *v*P}, {DP, AP}} のラベルを決定するために，{DP, *v*P} は元位置を離れることが強要される。

（25） a.

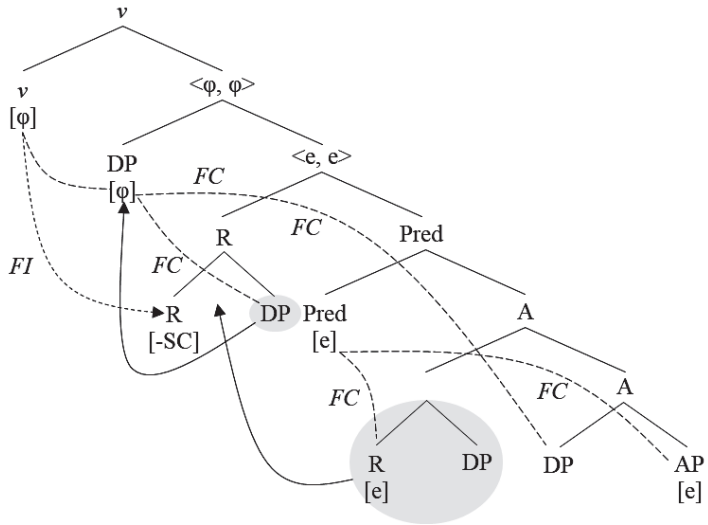


b.



続いて，内項指向の描写述語を見てみる。この場合，描写述語には動詞語根が関わっており，動詞語根には小節を選択するものとそうでないものがある。小節を選択しない場合，派生は外項指向の場合と同じように進む。異なるのは，*v*の*φ*素性はRに継承されるため，内項DPは（伝統的に言えば）その外側の指定部にIMされる点である。このDPとのFormCopyの結果，LAは低い位置にある2つのDPを無視するので，やはり全ての統語体のラベルが定まる。

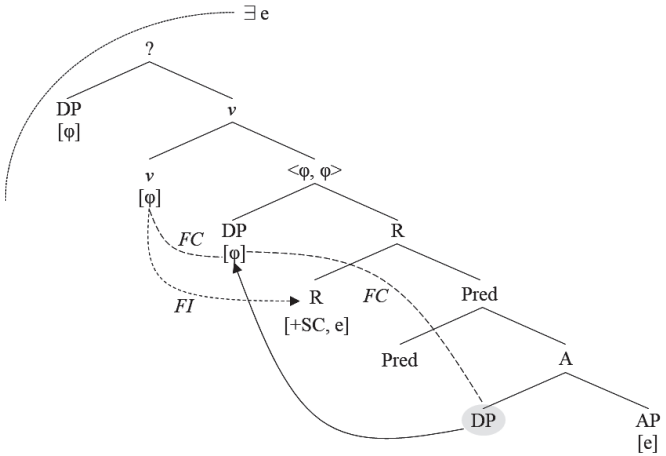
（26）



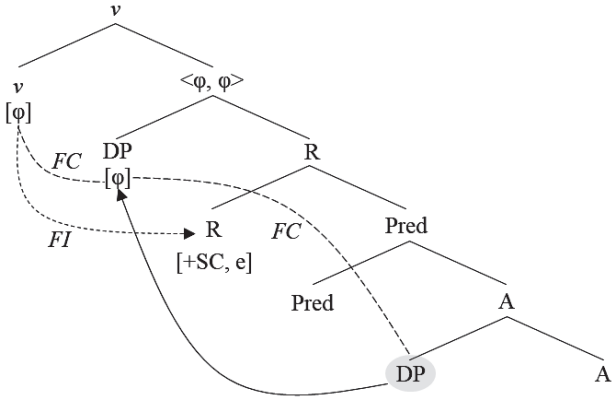
一方，動詞語根が小節を選択する場合，（27a）に示すように，PredPはRの補部として導入され，Predはe素性を担わない。内項DPがIMし，次いで*v*がEMされると，両者は*φ*素性において一致し，*v*の*φ*素性はRへと継承されて{DP, RP}のラベルは〈*φ*, *φ*〉となる。FormCopyが2つのDPを同定すると，下位のコピーは不可視となり，LAは{DP, AP}のラベルとしてAを検出する。結果として全ての統語体がラベル付けされ，派生は収束する。この場合，RとAのe素性にはFormCopyがかからないが，動詞句を作用域として適用される存在閉包によって両方の事象変項が束縛されるため，それらは同時と解釈され

ることになる。(27b) に示されるように，描写述語がILPの場合も，Aがe素性を欠く点を除き，同様の構造を持つ。

(27) a.



b.



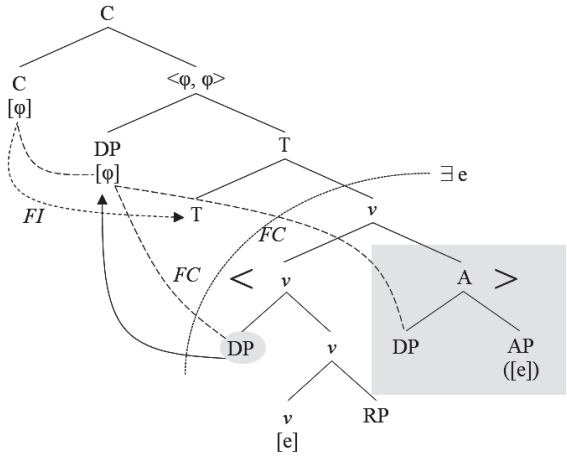
2節で概観したように，主語指向の述語は目的語指向の述語は異なる統語位置を占める。(24) と (26) からわかるように，何がPredPを補部として選択するのか，そしてPredの指定部にどんな要素があるのか，が異なる[6]。上記の構造が正しいとすれば，(9a) と (9b) の対比は容易に説明できる。(9) にお

いて外向述語が内向述語に先行しなければならないのは，（24）における*v*Pの位置に（26）もしくは（27）の*v*Pの構造が埋め込まれた構造になるためであると説明できる[7]。

では，Pred出現以前の構造を考えてみよう。表1から，M1期には全てのパターンの動詞と二次述語の持つ意味のタイプの組み合わせが存在したが，描写述語としてSLPとILPのいずれが現れるかということと，動詞が小節を選択できるものか否かということには相関が見られるということである。M3期以降では，SLPが潜在的に小節をとる動詞とも，とらない動詞とも共起し得るのに対し，ILPについては前者と共起した例しか見られない。したがって，M3期以降，小節をとる動詞の場合は，その動詞の選択特性に応じて補部にSLPまたはILPのいずれが現れる可能性もある一方で，小節を本来とらない動詞の場合，動詞の選択特性によって補部との意味関係を確立できないため，補部をとろうとすると，動詞と描写述語の事象項を同定することで意味関係を作らなければならず，そのためには両方がSLPでなければならない。これに対し，変化以前のM1期には動詞と描写述語の組み合わせにそのような制限は見られない。

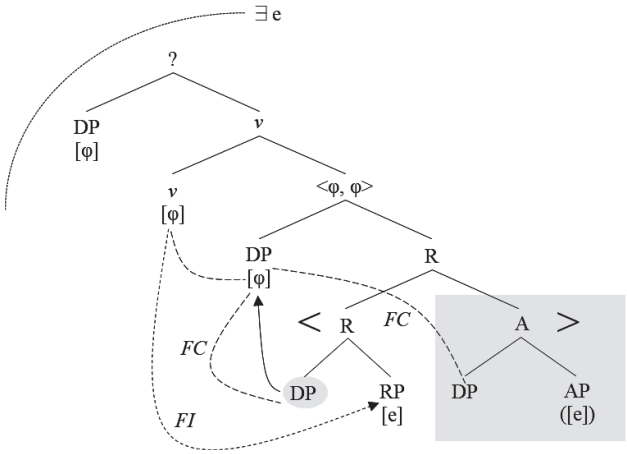
本稿では，Pred出現以前の段階の描写述語は主節に対併合（Pair Merge）されていたと主張する。（28）は外項指向の描写述語の場合である。{DP, AP}はLAにとって見えないため，{{DP, *v*P}, {DP, AP}}のラベルは，含まれるDPがFormCopyによって不可視となれば，移動に訴えることなく*v*に定まる。Aはe素性を持っても持たなくても，つまりSLPでもILPでもよいが，持った場合は，存在閉包によってその事象を*v*と同定される。

(28)



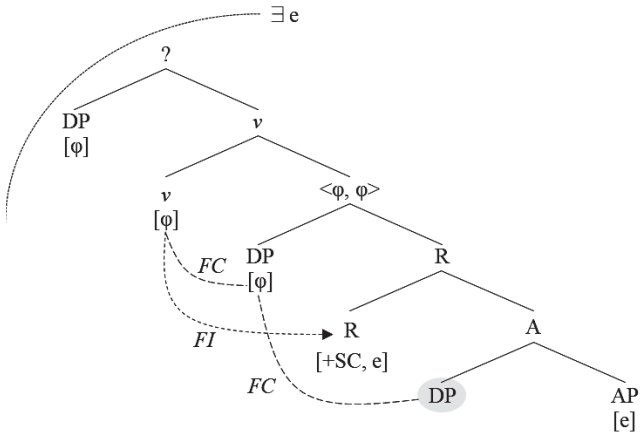
一方，内項指向の描写述語の場合，語根が小節を選択しないなら，構造は外項指向の場合と同様となる。対併合された{DP, AP}はLAに無視されるため，Rがラベルとなり，Aがe素性を担うなら，それとRが表す事象の同時性は存在閉包によって保証される。

(29)



最後に，語根が小節を選択する場合を見てみよう。Rの補部に選択された{DP, AP}からDPが抜き出されてIMし，形成された{DP, RP}は*v*からRへのϕ素性の継承によって〈ϕ, ϕ〉のラベルを付けられる。DP間に適用されるFormCopyによって{DP, AP}のラベルはAに定まり，AがSLPであればそれが表す事象は存在閉包を介して*v*のそれと同定される。

(30)



以上のように，描写述語の指向性と相特性，動詞の選択特性に対する制限は，PredPがその補部に一致条件を課し，かつ随意的にe素性を担うと仮定することで，FormCopyとLAの相互作用から自動的に導かれる。

6. 結語

本稿では，英語の描写述語を含む構文について，その意味的・統語的特性および歴史的経験事実を説明するために，機能範疇Predの出現前と出現後で構造が変化していると仮定し，その構造を提案した。

注

* 本稿の執筆に際し，2名の査読者に貴重なご意見やコメントをいただいた。この場を借りて心より感謝申し上げる。なお，本研究はJSPS科研費23K00576の助成を受けたものである。

[1] Chomsky（2021）ではFormCopyについて以下のように述べられている。

(i) Therefore the notion occurrence can be eliminated in favor of a rule FormCopy (FC) assigning the relation Copy to certain identical inscriptions. (Chomsky (2021: 17))

Omune and KomachiはΣAgrを使用しているが，本稿では議論の便宜上FormCopyという用語を使用することにする。

[2] 説明の便宜上，Agreeという用語を用いているが，これは最終的に転送の段階でFormCopyがかかっているという意味で理解いただきたい。これらの理論的枠組みの下で，描写述語の統語的・意味的特性に説明を与える構造を提案する。

[3] PPCME2における中英語期の時代区分は，M1（1150–1250），M2（1250–1350），M3（1350–1420），M4（1420–1500）である。

[4] 主語指向に比べ，目的語指向の用例は非常に少なく，また明確に目的語指向であると判断できるものが少ないため，全パターンの用例は掲載されていない。

[5] 査読者より，提案された構造ではPredの指定部と補部の位置が逆になる可能性があり，問題になるのではという重要なご指摘をいただいた。この問題については今後の課題とさせていただきたい。

[6] 小節の範疇が何かという問題については様々な議論がなされているが，(10)–(13)で概観したように，小節はVPよりは大きくCPやTPよりは小さい構造を持つと言える。PredPのような特別な機能範疇を立てても，*v*Pであると仮定しても，いずれの場合でもTより低く語彙範疇より高い位置にある。

[7] 査読者より，（8）の対比について提案する構造でどのように説明されるのかというご指摘をいただいた。なぜ目的語が前置できないかという問題は本稿の分析が特有に抱える問題ではないため，ここでは触れないが，今後の課題とさせていただきたい。

参考文献

Bruening, Benjamin. 2016. *Depictive Secondary Predicates and Small Clause Approaches to*

Argument Structure. Ms. University of Delaware.

Chomsky, Noam. 2013. Problems of Projection. *Lingua* 130: 33–49.

Chomsky, Noam. 2015. Problems of Projection: Extensions. In *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honor of Adriana Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann, and Simona Matteini, 3–16. Amsterdam: John Benjamins.

Chomsky, Noam. 2021. Minimalism: Where Are We Now, and Where Can We Hope to Go, *Gengo Kenkyu* 160: 1–41.

den Dikken, Marcel. 2006. *Relators and Linkers: The Syntax of Predication, Predicate Inversion, and Copulas*, Cambridge, MA: MIT Press.

Ike-uchi, Masayuki. 2003. *Predication and Modification: A Minimalist Approach*. Tokyo: Liber Press.

岸本秀樹・菊地朗. 2008.『英語学モノグラフシリーズ 5 叙述と修飾』. 東京：研究社.

Kroch, Anthony and Ann Taylor. 2000. *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, 2nd Edition*. University of Pennsylvania, Philadelphia.

McNalty, Elaine. 1988. *The Syntax of Adjunct Predicates*. Doctoral dissertation, University of Connecticut at Storrs.

Nakajima, Heizo. 1991. Reduced Clauses and Argumenthood of AgrP. In Topics in Small Clauses, ed. by Heizo Nakajima and Shigeo Tonoike, 39–57, Tokyo: Kurosio.

Omune, Jun and Masayuki Komachi. 2022. Agree in strictly Markovian derivations. Paper Presented at First International Conference on Biolinguistics of the UQTR.

Rapoport, Tova R. 1991. Adjunct-Predicate Licensing and D-Structure. In *Syntax and Semantics 25: Perspectives on Phrase Structure: Heads and Licensing*, ed. by Susan Rothstein, 159–187. San Diego: Academic Press.

Rapoport, Tova R. 1993. Verbs in Depictives and resultatives. In *Semantics and Lexicon*, ed. by James Pustejovsky, 163–184. Kluwer: Dordrecht.

Rapoport, Tova R. 1999. Structure, Aspect, and the Predicate. *Language* 75: 653–677.

Rothstein, Susan. 1983. *The Syntactic Forms of Predication*. Doctoral dissertation, MIT.

Svenonius, Peter. 1996. Predication and Functional Heads. *WCCFL* 14: 493–507.

Tanaka, Tomoyuki and Azusa Yokogoshi. 2010. The Rise of a Functional Category in Small Clauses. *Studia Linguistica* 64: 239–270.

横越梓. 2020. 英語の描写述語の史的変遷と統語構造. 『東海英語研究』2: 27–40.

Synopsis

A Labeling Analysis of Depictive Constructions

Azusa Yokogoshi

This paper observes syntactic and semantic properties of English depictive constructions. Subject- and object-oriented depictive predicates appear in different structural positions and it is claimed that subject-oriented depictive constructions are headed by the functional category Pred. Evidence for the presence of Pred was first attested in the fourteenth century and the frequency of its realization increased thereafter, which indicates that constructions including Pred underwent a structural change in the history of English.

This paper assumes that depictive constructions have undergone a structural change in the history of English and proposes their syntactic structures. It is shown that distribution of different types of depictive predicates is derived from the interaction of FormCopy and Labeling Algorithm by assuming that PredP imposes agreement conditions on its complement and optionally carries e-features.